

Fons



Camera Days

(写真・文) 五十嵐弘

学生時代、カメラや写真に興味はなかった。高校時代に仲良くしていたカメラ好きの友人に借りたカメラの「バシユツ」というシャッター音とズッシリした重さが心地よかったことを憶えているが、やはりカメラ・写真に興味がわくことはなかった。

自分が頻繁に写真撮影を行うようになったのは、社会人になってからだだった。工事写真の撮影と現像されたフィルムとベタ焼きの管理を担当することになり、カメラの操作と写真撮影のノウハウを急いで身に付けなくてはならなくなった。操作やノウハウは一日おきに事務所へ来るカメラ屋の店主の息子に教えてもらった。年齢も近かったので、すぐに親しくなり色々な撮影方法を教えてもらったことが懐かしい。確か、オリンパスかペンタックスの絞り優先の一眼レフカメラと50mmと35mmの単焦点レンズが与えられ、毎日36枚撮りのモノクロフィルムを2〜3本消費していたと思う。そして、カメラ・写真の魅力にハマっていったのだと思う。

現在、職業も変わり工事写真を撮ることは無くなったが、普段はデジタルカメラで撮影結果を確認しながら撮影している。そして、とっておきの写真は、お気に入りのフィルムカメラ達の中から二台を選びモノクロフィルムを詰め、結果を期待しながら思いを込めてリリースボタンを押す。フィルムを撮り切った後、良いカットが写っていることを祈りながら自分で現像し、気に入ったカットがあれば時間を掛けて大きく印画紙に焼き付けている。赤い灯りの中、白い印画紙に徐々に浮かび上がってくる愛しい人たちの笑顔がたまらない。

カメラ・写真

フォイズは、生涯学習センター発行の情報誌です。生涯学習とは、趣味や芸術文化活動にかかわることや、新しい知識・情報・技術を生かして自分たちの生活をよりよくする活動などで、人のつながりや交流によって広く伝わっていく学びの時間と言えます。今回は、趣味・芸術文化活動の一つから、写真やカメラを通してつながり広がりを作ってきた方たちをご紹介します。

(石川 千雅子・鴨志田 弘子・黒澤 貴子・黒羽 文男・塩原 慶子・武藤 卓)



太田二高写真部（現役）

市内にある高校の中で、写真部のあるのは太田二高のみ。歴史ある写真部の現在の部員さんにお話を伺ってきました。

.....

部員の皆さんにお話を聞いていたとき「部活紹介」という懐かしい言葉を耳にしました。高校の部活を選ぶとき、中学からの延長で選択する以外に、新しいステージで新しいことに挑戦する、可能性にわくわくする思いが、部活紹介・部活見学という言葉の裏側に透けて見えます。

子どものころから家族旅行で見かけた列車の魅力に惹かれ写真部に入った、お父さんの趣味が写真で、お下りのカメラをもらって楽しんでいる、部活の先輩が優しそうだった、毎日の通学風景が新鮮で、それを心にとどめるため、自転車を止めて撮影する、など写真部員の生徒さんたちはそれぞれに写真にかかわる楽しさ

を語ってくれました。

県展などの大きな作品展へ向けて、個人で撮影するばかりでなく、部員そろって撮影会に行くのも恒例の部活動だそうです。ネモフィラで有名になった海浜公園へも、毎年撮影に出かけるのだそうです。が「悪夢だ」というほどの混み具合だそうです。自分で撮影するだけでなく、友人の撮った写真を数多く見ることも、自身のレベルアップには欠かせないものと思われ、部活動の良さがスポーツだけでなく発揮されているのではないのでしょうか。

撮影会に出かける様子などを伺っていると、遠い昔になつてしまった高校時代に私たちも引き戻されるような感覚を覚えました。部員の皆さんが「長く趣味として楽しみたい」とそれぞれのカメラや作品を抱えての記念写真、撮られることも楽しみの一つではありますね。

茅根つかささん

太田一高写真部OG
大学卒業後、写真スタジオに勤務。



茅根つかささん撮影

写真部に入ったきっかけは？

中学ではテニス部だったので、長い時間持てなくなってしまっただけで、高校に入った時、帰宅部では楽しくないなと思って部活の見学をしたとき、廊下に写真部の先輩の作品が飾ってあって、これならできると思ったのがきっかけです。実家は印刷所を営んでおり母が撮影などしていたのでネガとかが身近にあり、写真は遠いところのものという感覚はなかったのもあります。

自分が撮った写真が全国大会にすすんだのが一番の思い出。中央の大会では、著名なプロカメラマンに作品の講評をしてもらえたりするので、そこにすすんでいる高校生たちの中には、すでに将来プロになると決めているような生徒もいて、プロの講評にくっついてかかっているような場面も目にしたりました。すごいな、と。

当時から、写真のプロを

目指していたのですか？

太田一高は進学校なので、

将来の可能性としてデスクワークや管理職へ続く道を選択するとうるか、技術職はあまり重んじられない空気があったような気がして、大学では幼児教育を学びました。それが変わったのは、竜神大吊橋でのバンジーで写真撮影のバイトをしたことが大きいです。プロのカメラマンとして食べていけるのはアーティスティックな世界

だけと思っていました。バンジーの撮影仲間には、三十代から四十代の人もいて、カメラを仕事にしていることがとても身近に存在していた。それが今写真撮る仕事をしていることにつながっています。

写真撮っていることで

何が一番楽しいですか？

自分は、自分の感情を整理するために写真を撮っています。人とコミュニケーションを取るのがありますが、大学で出会った友人たちはきちんとして自己開示していて、フレンドリーで。そういう「人」と自分はカメラを使ってコミュニケーションを取っていると、人を撮る魅力をそ

こで見つけたんですね。カメラがあるから、私は話せる、って。

写真スタジオでの

仕事はいかがですか？

とても楽しいですし、必死です。目の前の被写体に向き合って、求められるものの、一番いいものを探す…。親御さんはお子さんの笑顔を求めがちですが、子どもさんが何気ない瞬間にみせる大人びた表情やしぐさってとても好きなんです。それを提示して喜んでいただけるとき、そのご家族とつながれたような気がして、自分にとってもよるこびの瞬間です。



趣味を楽しもうとする多くの方が、家の中に趣味専用のスペースを作ることを見ることがあります。アトリエ・書斎・ワークスペース、様々な呼び名がありますが、必要な道具が手近にあり、制作に没頭でき、さらには作品を飾る。その空間は、趣味を通じた人と人の交流の拠点ともなっているようです。

佐川憲一郎さん

下高倉町

佐川憲一郎さんは、フォノンズ巻頭の写真を提供してくださったことも多く、長く写真撮影を楽しんでこられました。太田一高在籍中は天文部で星の観察を続け、「就職して最初の給料でカメラを買って」から、写真撮影を始めたそうです。ご自宅近くで撮影したという「バラ星雲」の写真、星が天空を一晩かけて描く軌跡の作品など、天文の知識があつてこそその作品も多くご自宅のギャラリーに飾られています。

写真を飾るパネルを手作りするのもお手のもの、ギャラリー奥の暗室には、現像用の機器をはじめ、プリンター、プリントした写真を急速乾燥させる機器など様々な機器がならんでおり、趣味のアトリエの理想のように思える空間になっていました。

奥様の美都里さんは、太田一高の写真部OGから現在は油絵に、カメラを筆に変えて

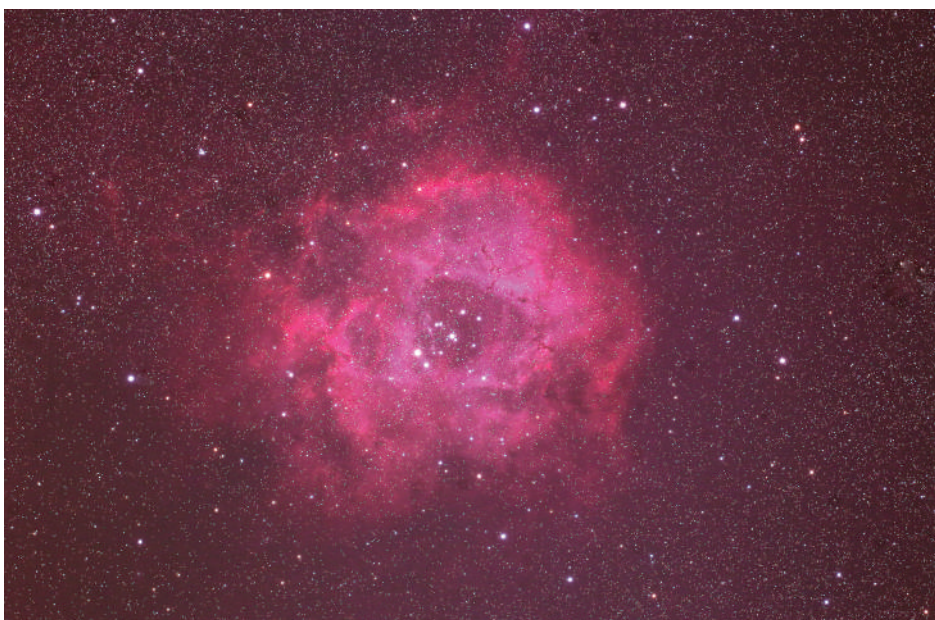


佐川さん撮影の竜神大吊橋と紅葉

楽しまれています。ギャラリーには憲一郎さんの写真と美都里さんの絵画がきちんと向かい合っただけで飾られており、日本各地のビュースポットへはご夫婦ででかけることが多いとか。生涯学習という固い言葉では表しきれない豊かな時間が、そのギャラリーにはあふれているようでした。



写真を飾るパネルも手作り



佐川さん撮影のバラ星雲

萩庭 隆さん

下河合町

十日後に迫った定年を迎えゴルフ三昧の日を想像していた時に脑梗塞で倒れ、左半身不随となってしまうた萩庭さんを、カメラの道に押し出してくれたのは会社員時代の同僚や奥様からの「カメラでもやったら」という言葉でした。会社員時代に仕事としてビデオ撮影や動画編集を手掛けていたため撮影機器の扱いの基礎もあり、一眼レズを手にすること



萩庭さん撮影の幸久大橋

になりました。

撮影する写真はスナップが多く、何気なく撮影したお孫さんと奥様のシーンが、子ども用品量販店の写真展で店長賞をいただいたことが、さらに写真にのめりこむきっかけとなりました。

幸久大橋の常陸太田側の信号横、車で通過するとき目にいくアニメのキャラクターを壁一面に描いてある建物が、アトリエ兼ギャラリーとなつています。「孫のために好きな絵



萩庭さん撮影の水郡線久慈川鉄橋



ギャラリーをたずねてきた幸久小学校の児童たち

を描いた」「小さい絵はだめ、でっかいとうまく描ける」との言葉通り、ギャラリーとなつている車庫のシャッターをはじめとして壁面にかわいらしいアニメキャラクターが勢ぞろいしています。

お孫さんが小学生の時には、学校の行事の折々に撮影してはプリントした写真を写したみんなに届ける。地域の行事を撮影してと依頼されることも多く、全員にプリント写真を届けること、お祭りの撮影では、撮影して自宅に戻りプリントして翌日届けるなど写す相手の方たちとの交流も欠かしたことはありません。最近では機材の扱い以前にカメラマンとしてのルールを知らない人が多くなったことが残念だそうです。

写真を通じて、ギャラリーに遊びに来られる人はもちろん、友達・仲間・知り合いが増えたことがとてもありがたい、と萩庭さん。「何かを見つけて始めれば楽しみが広がっていく」、今は地元は何をお返しできるか考えながら毎日カメラを構えています。

太田一高写真部OB 大和田靖さん

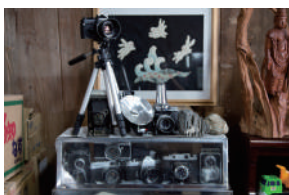
西二町

「好きなことは、とことんやらなきゃだめ」「カメラを始めたのは、中学校の部活から。当時は太田中学校に写真部がありました。それから太田一高にすすんで」ずっと写真を楽しんできたそうです。日光の景色がとても好きで、何度も通って撮影にトライ。樹氷の季節に真夜中から、夜明けの一瞬の光を狙って待ったり、常陸太田と撮影場所の天候の違いで思うような光を見つけれず、無駄足になったことなど、思っ

ります。飾ってある写真をみて来店したお客様と話が盛り上がることも多かったそうですが、今は、カメラもほとんどを息子さんに譲って「写真は卒業しました」。趣味を手放してしまった今でも「好きなことは、とことんやらなきゃだめ」と、今ではソフトボールに親しんで三十年になるそうです。



大和田さん撮影の小田代が原



大和田米穀店



ちよつと
ひといき

十国クライミングジム

塩原慶子

このボルダリングジムは、オーナーの菊池博之さんのお子さんが高校生の時に興味を持ったボルダリングのためにお父さん自らが手作りした練習場として建設されました。お子さんが巣立った現在は、せっかくの練習場を一般の方にも利用していただけるよう開放しています。現在、市内の放課後デイサービス施設数か所が定期的に練習に通っていたり、一般の方が訪れて体験をしたりしています。壁二面に設置された色とりどりのホールドを見ると、ついついトライしてみたくなる、そんなスポーツを一度体験してみませんか。グループでのご利用がおすすめです。

ジムに来場の際は、必ず予約をお願いします。



349号旧河内小学校入口を左折、十国峠水府方面の看板の手前を右折、突き当たりT字路を左折し、道なりに進むと写真の看板があります。

- 住所／常陸太田市西河内中町644
- 電話／78-0277
- 利用時間／10:00～21:00くらいまで
- 利用料金／一日体験利用料 500円(大人、子ども)
登録会員 大人300円、子ども200円



学校訪問

里美小中学校

塩原慶子

里美小・中学校は平成二十六年に常陸太田市で初めて施設併設型小中連携校としてスタートしました。そのため生徒会活動も他校とは違っているところがあります。

例えば、大きな行事（体育祭・文化祭等）では小学校の六つの縦割り班の班長と生徒会役員・実行委員で企画や運営をすることがあげられます。

■里美中学校スローガン

昨年十月の生徒会引き継ぎから、次年度の生徒会スローガンを決めるため、全中学生からアンケートを取るなど丁寧に話し合いを続け、五月の生徒総会で「本気ー何ごとにも挑戦あるのみ」が採択されました。「里美んピック（小中学校合同の体育祭）では、全体を三つの縦割り団に組織し、三チームの対抗戦として「本気」で競技しました。

■生徒会の伝統・里美・小中の伝統



生徒会長 根本 義暉さん（前列右）
副会長 青砥 圭佑さん（前列左）
副会長 佐藤 直幸さん（後列右）
書記 興野 笑理さん（後列左）



里美んピック

小中学校では「小中縦割り班遊び」があり、異年齢の遊びを月一回楽しんでいきます。

普段の生活から年長者が小さな子に目を配り、年少者はお兄さんお姉さんの立ち振る舞いを見て育ちます。「生徒会も先輩がとても楽しくてフレンドリー」と会計の佐藤君が言うような、全校児童生徒が兄弟姉妹のような仲の良さは、そのような毎日から生まれるのかもしれない。

里美かかし祭に出品するのも伝統



里美かかし祭

の二つです。今年初めて部活動ごとに出展予定です。生徒の夢のある作品が楽しみです。



文化の泉

町田焼研究会

黒羽文男

町田焼研究会は、平成十五年に窯跡の発掘調査を機に発足しました。町田焼きは、第九代水戸藩主徳川斉昭公が産業振興の一環として推し進めた陶製事業です。百七十年前に使われていた窯跡からは、数多くの陶片が発見されており、会長の川上愛（めづる）さんは、「当時どのような思いで陶器を作っていたのか、興味やロマンを感じる」と言います。町田焼研究会の活動は、毎月第二木曜日に常陸太田市郷土文化保存伝習施設「こしらえ館」で町田焼きに関する史料、文献の研究そして、製陶技術の習得などを行っています。また、町田焼きの歴史を後世に伝える活動もしています。地元の水府小学校と水府中学校で児童生徒そして父兄を対象に町田焼きの作陶体験学習会を毎年開いています。川上会長の夢は、「町田焼が長く後世に伝わり、陶芸家が現れ地場産業になれば嬉しいです。地元の小中学生に期待しています。」と楽しそうに語ってくれました。

新入会員を募集しています

- 活動日／毎月第二木曜日
- 活動場所／常陸太田市郷土文化保存施設「こしらえ館」
- 会費／年間 5,000円
- 入会希望者連絡先
会長：川上 愛（めづる） 85-1022
事務局：川上 明文 85-0695
常陸太田市教育委員会文化課 72-3201





思い出の絵本

もつたないばあさん

木村裕美(栄町)



「もつたないもつたないもつたないもつたない」と言っているもつたないばあさん。その迫力に三歳の息子もおぼけと肩を並べる怖いものとして位置づける程の絵本です。でもこのおばあさんは、物を大切にすること・無駄な使い方をしないことなど現代の私たちにとって忘れてしまいがちな「もつたない」という気持ちを通して、存在でもあります。実際に私は子どもたちと関わる仕事をしており、その中でこの絵本を繰り返し読んでいくと自然と「もつたないばあさん」が「ね」と水の出しっぱなしに気が

をつけたらご飯粒を残さず食べたり、電気がつけばなしになっていることに気づいたりという姿が多く見られるようになりました。そんな子どもたちの姿から私自身も気づかされたり「もつたない」ことをしていないかと日々の姿を振り返る機会にもなっていました。

絵本を読むことで「物を大切にすること」を学ぶことが出来るということはとても素晴らしいことだと思います。これからも息子や関わって行く子どもたちに繰り返しこの絵本を読んでいきたいと思えます。そして「もつたない」という昔ながらの精神や物を大切にしようとする心が広がっていくといいなと思えます。

常陸太田の地名話

26

和見『常陸太田市大中町和見』

川松 博

和見の地名由来には、二つの説が考えられるという。一つは、山合い、谷合いという地形に由来するという説。和見はこのほかに「和味」とも書かれ、これは、山合い、谷合い、谷間を意味することばである。二つは、和見は和路（わじ）が訛つたものらしく、道路に關係する地名という説。和見の近くには、むかしの官道の雄薩駅家があったことが有力

になっている。和路とは、官道の意味することばである。この二つの説には、これという確証はとれないが、山合いにある和見の集落から考えると、和見は山合いという地形に由来する地名と推測できるが、どうだろうか。

和見を通る道は、旧水府村高倉より外の内を通って国道三四九号を横切り、山麓の根岸に向かっていく、古くからの道である。和見の古老は「む

かし、この山道は高倉方面からの本通りで、人の往来もはげしかった。



和見の集落

結婚式の赤いしめ樽を積んだハイヤーも通っていて、折橋のりっぱな道路ができる前は貴重な道でした」と話している。

参考文献
「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」「里美村史」「広報さとみ二五七号」

ひとついっき

アレチウリ 荒れ地瓜 (ウリ科)

安嶋 隆

つる植物で、北米原産の外來生物です。九月十一月、里川や源氏川、久慈川などの堤防で緑一面に広がっているのはクズとアレチウリです。日本には一九五二年(昭和二十七年)に静岡清水港でアメリカやカナダからの輸入大豆に種子が混入しているのが確認されたのが最初とされています。それから六十年以上経過した現在、全国に広がり、他の植物に悪影響を及ぼすというので特定外

來生物に指定されています。写真のようにすさまじい繁殖力です。果実には長い棘が密生し、スポンを通して刺さったりするので冬の河原を歩く時は要注意です。

以前はマダケやセイタカアワダチソウの増加が目立ちましたが、最近ではクズとアレチウリの悪影響が問題視されるようになりました。このような状況が続くと、日本の植物の住み家が失われてしま



う危険性があるので、アレチウリは特定外來生物に指名手配されているとは夢にも思わずどんどん増えています。

お知らせ

都合によりお楽しみをお楽しみに。新太田は、みえを休回待ちにお楽しみください。